
地獄から始まる転生日記

アリス法式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄から始まる転生日記

【NNコード】

N9834Y

【作者名】

アリス法式

【あらすじ】

自動車に轢かれるわけでもなく、船から落ちるわけでもなく、夭寿を全うした俺、そして今俺の前には、幼女様が座つておられる。

「転生したいなら、地獄に逝くのじゃー！」

確かにそんな科白の元俺は地獄に陥りました。

ああ、なぜだ幼女様…………！

「幼女様とゆうな———！」

これは、一人の男が天寿を全うしたり、魔物になつて見たり、地獄に落とされたりするお話。

彼が天国にいけるのはいつになるやら。

真年98歳で地獄遊記（漫書卷）

ああああああああー

やつつけひまつた、思わず書いてしまつた。

はあ、とつあえず銘打つなり地獄編、じつもいつも広げた風呂敷？
でよかつたつけ、をぜんぜん回収しようつとしない駄目駄目な作者で
すが。

書きたいものがあればとつあえず書くのがモットーなもので。

あああああああ。

「アロ、アロ、ベーカ、こて

とつあえず、楽しんでいただけたりじいまでもがんばれるかもしけ
ない夢見がちな作者の思いつきの転生口記、地獄編楽しんでいただ
けたら続きもかけます。

享年98歳で地獄逝き

・享年98歳

人間としては天寿を全うしたといえるだろう。

息子や娘、孫達に囲まれて俺は旅立つた、新たな生、この天国へと。何だろう、死ぬ前は、記憶とかもあやふやで、幼児退行したような感じだったのに、今はすっきりしている、視力にしてもこんなに世界が広く見えたのはいつ以来だろうか。

自分の身体を見下ろしてみても、その姿は二十歳前後、数メートル歩いただけで疲れることもないし、腰を曲げてヨチヨチ歩く必要もない、良く娘には、父さんはいつまでも若いねといわれたものだが、最後は息をするのもやっと感じだった。

などと考えていると、同じように歩いている人々列が無くなり、私の番が来たようだ。

何のことを言っているのかといえば、目の前、天国行き・地獄行きという二つの看板を抱えた扉の前、業務用の大きな机に座つてペッタンペッタンと、判子を押している幼女、ようじょ？が人々を左右の門に振り分けているようだ。

「柳堂 正治享年98歳ですね」

その見た目に反しない可愛らしい声で、しかし威厳を感じさせる声で少女は俺の名前を読み上げた。

「はい」

生前では、最後のほう看護士さんの呼びかけにも答えられなかつた
私が、今ははつきりと発音することができた。

「おぬし、もう生に未練は無いか

何だらう、鈴のような声といえればよいのだろうか、そういえば孫の幼稚園の学芸会でこんな感じの声を良く聞いた気がする。

「おい、聞いておるのか

「は、はい」

いかんいかん、少しへリップしてしまつた。

ふむ、生に未練が無いか?とな、最後のときでも思い出してみよう
か、周りで悲しそうに泣く孫達、その後ろでぼそぼそと会話してい
る俺の子供達、そう、その後は、孫達に、おじいちゃんを笑顔で送
つてあげましようね、と、言つていたのは長男の嫁だつたかな。
その後の、孫達はバイバイおじいちゃんつて、一人一人手を握つて
見送つてくれたつけな。

その後、子供達も目に涙を浮かべながら、元気でねつて言つてくれ
たつけ。

笑つて、言つていた長男の嫁もわずかに涙を浮かべながら精一杯笑
顔で見送つてくれたね。

その胸に、大切そうに私の生命保険の契約書を抱きしめていたけど
・・・・・。

「――――――――――、おい、聞いておるのか

「は、失礼いたしました、幼女様」

「だれが、幼女様か！」

その瞳に、うつすらと涙を浮かべた幼女さんが、あつ、といひりを睨んでいらっしゃった。

「うう、それで未練はあるのかと聞こえてる

わつやともうせ、今日の分の仕事が終わらぬでは無いにか、どぶつぶつ言つてこる幼女様の言葉をきいて、もう一度トリップ。

「帰つてこんか――――――

できなかつた。

「そ、それで、みれんば、ありゅのか、うぐ、ひくひく

ああ、とつとう泣いてしまつたよつだ、泣いた幼女様もいいなー、俺の孫に匹敵するぜ！

もつと見ていたくもあつたのだが、さすがに孫もいる身で、この年頃の子供を泣かせてしまつたのはなかなか罪悪感があるものだ。

「そうですね、あるとこえればあります

よじよしと頭をなでながら答えると、やつと泣きやんでくれた。

「ひつ、あるとこえばとは、ひつ、ずいぶん適切な言葉じゃな、天寿を全つしておきながら、ざいに未練があるといつのじや、ひつ

孫達の世話をもっていたからな、子供のあやし方はお手のものだぜ、

「……………んいか、がんばるのじやな」

なみだ目の幼女に慰められました。

「それでは、転生を希望するところよりもこのじやな」

「話が進まんのよ、おぬしのむごじゃからなー。」

「どうしたのですか、幼女様」

幼女様じやない、となお怒られながら、とりあえず話を進める。

一 それでは、進路決定じやな

「そんな面接のように言われても」

そういうって、幼女様は一個あつた判子の一個、赤黒いものでできた判子で、俺の資料にペッタンと一つ押す。

「それでは、逝つてくるのじゃ

そう言つと共に、幼女様の背中にあつた門のひとつ地獄逝きが開いた、あれ?さつきと文字が変わってないか。

そして幼女様の手元には、地獄逝きとでかでかと判子が押された俺の書類が。

「ええと、俺は転生するんですね」

「やうじや、だから地獄逝きなのじや」

「え、どうゆう事、俺何かした?」

「地獄とは、罪を背負つたものが行くところなのでは? 幼女様」

「ええい、うるさい!、後ろも詰まつておる、やつせと逝くのじや」

もう、幼女様の部分につつこんでもくれなくなつた幼女様は、開いた地獄逝きの門から出てきた一人の鬼に俺を押し付けると、問答無用で、地獄の門を閉じはじめた、え?自動で開いたのに閉めるのは手動なの?

「それではの人間、せいぜい黄泉路の旅を楽しむと良いわ!」

その立ち姿に、よほどイライラがたまっていたのか似合わぬ高笑いを浮かべた幼女様を背中に俺は鬼達に両腕をもたれたエイリアン状態で、目の前を流れている川までつれてこられる。

ああ、これが三途の川か、向こう岸に父さんたちでもいるのかね、と考えていた俺の腕を鬼達はなぜか離してくれず、そのまま地獄逝き下り便と書かれた看板の横まで連れてこられた俺は、

三途の川に流された。

ええ、流されましたとも、いづかざーとね。

ええー、三途の川って渡るものじゃなくて流すものだつたんだ。
バイバイーとけにフレンドリーに手を振つている鬼達に、手を振
り替えしてから。

俺の意識はふつつと闇におちた。

享年98歳で地獄逝去（後書き）

全略

書きたいことは全部前書きに書きました！

後書きくとすれば、誤字脱字があつたらお願ひしますぐらいでしう
か？

え、聞くなつて？

新しい作品を書くとこめぢやくぢやになつていく、天邪鬼な作者
ですが、どうかお付き合いくださ。

ふむ、天邪鬼、漢字にしたらかつーいなどこかでモンスターとし
て使うか？

全略と書いておいて長くなつたあとがきも終了。

暖かい声援を書いてくださつたら、この物語はどこまでも続きます。

え、終わらせろって？それは後書きを？物語を？

それは無理だね、どこまでもできる自由度を作り上げたのだから。

ははははははははーーー！

それでは、壊れかけの作者の後書きは終わります。

三途の川を渡り火界で遊ぶよ・灼熱地獄編（前書き）

いえ――！

思わず、そのまま一話目も書いてしまったぜ。

さてさて、この先にどんな地獄が待っているか、

ああん、餓鬼道？、人間道？そんなの関係ないぜ、

何せ、のりで書いてるからな。

三途の川をどこまで逝くよ？灼熱地獄編

「ぬ、
でかいな」

やがて———つ、そのな声と共に、俺は目を覚ます、

「おれは、生きてるー。」

しかし何だこの浮遊感は、そう思つてなにかつっぱてゐる感覺がある背中を見れば、針と糸、糸をたどれば立派な釣竿、そしてそれを握り締めるたくましい腕の持ち主は鬼！

「やつぱり死んでるー！」

「なんだ人か、リリースだな」

「しないで――――――!」

そのたくましい腕でちゃんと針からはずされた俺はそのまま、川に流れされそうになつて、すっとぷをかけた。

「しかしながら、人は食つてもうまくないんだ」

「食つたのかよ！」

お前ら、番人じやないのかよ。

そこまで、考えて私は今の状況を思い出した、確かに私は死んで、幼女様にあつて、なぜか地獄逝きで三途の川に流されたつと。

「どうだ？」

「ここか、地獄だな」

「ああ、地獄だな」

目の前はまさしく地獄だつた、ぐつぐつ煮えたぎる溶岩、とげとげしい剣山、光り輝く筋肉、躍動する筋肉、美しい筋肉。
溶岩に囲まれた、小高い広場の上で踊り狂う、筋肉どもがいる光景
は、まさしく地獄だつた。

「うーん、ここが地獄か」

思わず生睡を飲み込む私、

「て、何で筋肉が踊りぐるつとんじゃ———。」

「あの溶岩の暑さが、汗をかくのにちょうどいいらしい」

律儀に答えてくれた、鬼さん。ありがとうございます。

「わかるか、新入り、あいつらは己の筋肉ひとつで地獄の業火を乗
り越えたんだ」

ふつ、と鬼さんは一ヒルな笑みを浮かべると、

「お前も、やつていいか?」

そう私に、
問い合わせた。

「いや、チハノジで」

いや、私今年で98なんで、そもそもあんな乗りついていけないんで。

「あつそー、じや、バイバイ」

言葉尻を、流されたわけではありません、普通に川にリリースされました。

「次こそは、晩飯を釣り上げるか」

鬼さんは、凝り固まつた背筋を伸ばすと、機嫌がよさそうにまた釣り針を川に投げてのんびり座り込むのが、すでに30メートル先に見えます。

「あ、そうだ新入り、その先、滝だから」

危険だぞー、とやけに間延びした声が、徐々に速くなつていく川の速度と共にドップラー効果となつて俺の耳に、

本日、何度目かわからない絶叫を上げて、え、まだ一度目だつて？ 知るかそんなこと。俺は滝つぼに向かつて空を飛んだ。

ああ、昔ナイアガラの滝を樽で下るとか、ふざけた番組があつたよ
うな・・

「そんあ、ことを考えながら、川から空に放り出された私は、下を見て絶望した。

「なん……だと、滝つぼが見えないと」

私がいる現時位置、上空数千メートル。

「せつぼひした――――――――――――――――――

そんな声が、地獄の入り口に響いたとか響かなかつたとか。

「あ、やべー忘れてた」

そして、鬼さんも二十歳くらいの人間が流れていつた後、何かに思
い当たつたかのように、はつと釣り糸から意識を今さつき人間をリ
リースした川の方に向ける。

「この川、魚釣れないんだつた」

川の先のほうからそんな声が聞こえたような聞こえなかつたような。

「ま、いいか、こうしてればまた何か釣れるだろ」

その意味は考へず、またのんびり釣りに戻る鬼さんだつた。

と、いうわけで、どういうわけだ？、知るかそんなもの。

この作品は作者が乗りとやる氣と歡喜とストレスをぶち込んでない
交ぜにして、書いている感じまで逝っても混沌な作品です。

うるをいつて？、そんな反応は違う作品のところで話してくれば、これだけはどこまでも突っ走るぜ、転生するけどチートなし、生きているけど死んでいる。

それがこの作品のセリフだ。

て
い
か
今のおおたか! あともは轉生で見るかど^二かも怪しいせ

誤字脱字感想意見お待ちしています。

あと、主人公をどこまでもいじめたいつて方、あつたら書くよ、がんばるよ。
二までだつてがんばるよ。

皆の声援を糧に生きてます。

何かありましたら、書き込みお願いいたします。

お楽しみください。

は、幸せものが、ただじや死なさないぜ、え？死んでる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9834y/>

地獄から始まる転生日記

2011年11月29日21時45分発行